

## ヨハネ3章16節「私たちが愛してやまない神」

### 1A キリストへの礼拝

#### 1B 羊飼い

#### 2B 東方の博士

### 2A 独り子を与えられた神

#### 1B 人々の間に住まわれる

#### 2B 尊い代価

皆さんがお越しいただいた訳は、クリスマスをご紹介したかったことです。クリスマスの意味をお伝えたいと思ってお招きしました。クリスマスは英語ですと、Christ-mas です。Christ がキリスト、そして mas はミサのこと、礼拝のことです。キリストを礼拝することが、その言葉の意味になります。

### 1A キリストへの礼拝

私たちが先ほど歌った讃美、そしてこの後にも讃美歌を何曲か歌いますが、それらは皆、イエスが生まれて、その赤ん坊を拝みにやってきた人々の話であります。

#### 1B 羊飼い

ローマ皇帝が、ローマ帝国の全住民に住民登録をせよという勅令を出しました。そこで人々は、どんな事情があろうとも強制的に出身地に戻り、登録の手続きをしなければいけません。けれども、イエスを身ごもっていたマリヤは妊娠していて、その段階も後期になっていました。ガリラヤにあるナザレという村から、ユダヤにあるベツレヘムへと長い距離を移動しました。そして、ベツレヘムに到着すると、臨月が来て、家畜小屋で出産しました。宿屋を探したのですが、彼らのいる場所がなかったのです。

けれども、ベツレヘムの野原で、羊飼いが夜番をしていた時に、天使がやって来ました。そして、ユダヤ人に約束されていたキリストが、今ベツレヘムで生まれたことを告げました。そして天の軍勢が現れて賛美して、「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。(ルカ 2:14)」と歌いました。そして、羊飼いたちは喜んで、「今、私たちに主が知らせてくださった出来事を見に行こう。」と言いました。すると、家畜小屋で、飼葉おけの中に布にくるまれて寝ておられる嬰兒を見ました。これが、初めのクリスマスです。

#### 2B 東方の博士

そして月日が経ちました。ヨセフとマリヤ、そしてイエス様はベツレヘムにしばらく滞在していたようです。それから、イラク、イラン辺りから、はるか東方から賢者たちがエルサレムに訪問しました。そして彼らは、「私たちは星を調べていましたら、ユダヤ人の王のしるしを見ました。その方を拝み

にやって来たのです。」と言いました。そこには、ユダヤ人の王ヘロデがいました。彼は驚き、恐れしました。なぜなら、自分がユダヤ人の王なのに、他にユダヤ人の王が生まれたというのです。聖書学者たちに聖書を調べさせると、確かにベツレヘムからキリスト、ユダヤ人の王が出るということが書いてあります。「私も後で言って拜むから、ベツレヘムに行ったら教えてくれ。」と言いました。

そこで東方からの賢者が出かけると、なんと自分が探していた星がベツレヘムの、幼子イエスがおられるところまで導いていったのです。そこに幼子イエス様がマリヤといっしょにいました。そして、彼らはひれ伏して拜みました。そして、黄金と乳香、そして没薬を贈り物として捧げました。

## **2A 独り子を与えられた神**

これが、クリスマスの具体的な出来事です。けれども、なぜ赤ん坊を、また幼子を拜むのでしょうか？そこに何の意味があるのでしょうか？教会は、キリストを自分の救い主と信じている者たちは、同じようにこの方を拜んでいます。この時期に限らず、一年中、それを行っています。なぜか？

### **1B 人々の間に住まわれる**

聖書にこういう言葉があります。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。(ヨハネ 1:14)」この「ことば」というのは、永遠の昔から存在している神であり、万物を創造された神のことを指しています。宇宙をも創造された、この時間空間を超越しておられる永遠の神が、肉体を取られたということです。神が人となられたのです。しかも、「私たちの間に住まわれた」とあります。王のように豪華な宮廷に生まれたわけではありません。また、修行をする宗教者のように、人里離れた岩で生まれたわけではありません。人ごみの中に入り、しかも宿がないというので家畜小屋に生まれたイエス様です。この天地を創造された神が、私たち人間のあらゆる生活の中に共に住まわれるために、このような形で人となられたのです。

したがって、イエス・キリストは神であられ、永遠の昔からおられ、天地を創造された方です。同時に、こんな小さな私たち人間のすべてのことを知っておられます。イエスにあって、神と私たちはちょうど母親の胸に抱かれた乳飲み子のように、親密な関わりを持つことができ、この方に拠り頼むことができます。

この言葉、「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」ということについてですが、アメリカでこんな話があります。クリスマスの時、家族で礼拝に出席するために教会に向かいました。けれども、そのご主人だけ、お父さんだけは家に残りました。この男性は、「神が人間の肉体を取る。」という考えに付いていけなかったのです。クリスマスの度に教会でその話をされるので、彼は敢えてその時に教会に行くのを避けていました。妻や子供たちが教会に向かった後で、雪が降り始めました。しんしんと降り続きましたが、彼は暖炉のそばで新聞を読んでいた。すると、「どしん、どしん」という音が窓から聞こえてくるのです。誰かが雪玉でも投げているのかと思いきや、な

んと鳥の群れが降雪の中でどこに行けばよいか分からず、行き詰まってしまったようなのです。避難するところを探しているようで、その大きな窓を通り抜けようとしているのです。

彼は、「かわいそうに、このままではこの鳥さんたち、凍え死んでしまう。」と思いました。それで、「納屋があるではないか」と思い出しました。納屋に入ってもらえば、寒さをしのげると思ったのです。それで、急いで、納屋に行き、その戸を大きく開き、光を付けました。けれども鳥は入ってきません。それで、戻ってパンくずを持ってきました。それを納屋に導くように少しずつ落としていき、その餌につられて納屋に入ってくれることを期待したのです。けれども、鳥は無視しています。彼は手を振って鳥を招き入れようとしたのですが、逃げるだけで、納屋にだけは入ってくれません。鳥は自分のことを恐れているようです。彼を怖がっているのも、何をしても鳥たちを慌てさせているだけのようです。そこで、思いました。「鳥になりさえすれば」と。彼らの中に混じって、彼らの言葉を話して、恐れなくてよい、と伝えて、そして暖かな納屋に導けるのに」と思いました。その時に教会堂からのベルの音が聞こえたそうです。クリスマスの讃美歌を奏でるベルだったそうです。彼は雪の中にひざまずきました。…こんな話です。いかがでしょうか、この宇宙をも超越した神、絶大が神が、私たちの間に住まれたという、その目的であります。

神はもはや、私たちが通っているあらゆる感情、痛み、喜び、怒り、それらを知らないでいることはありません。自分がこんなところを通っても、他の人には一切分かってもらえなかったからということがあっても、神はご存知です。なぜなら、神は全てを知っておられるだけでなく、その肉体において同じ弱さを自らに負ってくださったからです。人間のあらゆる不条理、嫌なこと、不快なこと、これらのど真ん中におられ、私たちに同情できない方では決してないのです。

しかし、それが家畜小屋という、家畜の臭いも漂うところで生まれたということ、そこには人間の闇の部分をも暗示しています。「光はやみの中に輝いている。(ヨハネ 1:5)」ともあります。キリストの生涯は、私たちの心の奥深くに直球で玉を投げてきます。つまり、私たちは、自分がまともに生きていて、普通の人間で、大きな問題を抱えていないと言い聞かせています。けれども、イエス様が語られる言葉は真理でした。だから、私たちにとって不都合なことも語られます。汚い自分が露わにされます。そして、その汚い部分をそのまま認めて、ありのままの自分を直視する時に、私たちは愕然とします。しかし、そこで初めてそんな汚い自分のために、イエス様が生まれてきたのだということに気づき、自分自身が生まれてきた理由、なぜ生きているかの理由を発見できるのです。

## 2B 尊い代価

そして、神は人となられただけでなく、愛してご自身を私たちに与えるために人となられました。聖書に有名な次の箇所があります。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ 3:16)」ひとり子をお与えになった、とあります。イエス・キリストが神のひとり子でした。この方

をこの世に与えるほどに、私たちを愛してくださっているということです。どのように愛しておられるのか？「代価を払った」という意味で愛されました。私たちは愛のない時代に生きています。全てが便利のため、効率のためにできています。だから犠牲という言葉が化石のような言葉になりました。しかし、私たちは弁当屋の弁当と、母親が作ってくれた弁当とどちらがおいしいですか？犠牲があって、対価があって、初めてそこに愛があります。

天国のたとえとして、イエス様はこう語られました。「天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買い取ります。また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。すばらしい値うちの真珠の一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。(マタイ 13:45-46)」畑の中の宝、また良い真珠、これらを買取するために、自分の全財産を売り払って買い取ったという例えです。この宝は、また良い真珠は、私たちのことを表しています。それだけ愛されているもの、自分の全てを投げ打つことです。これをイエスが成し遂げられました。イエスが成人し、そして最後に十字架に付けられ死にました。命を投げ打ったのです。神にとって、金銀が高価なものではありません。宇宙を造られた神にとって、そこら辺のダイヤモンドも安価です。そうではなく、自分自身の愛する独り子を私たちに代わって死なせるようにさせた、これほど大きな対価はありません。

御子を信じる者が滅びないで、永遠の命を得るためである、と先ほどありましたが、私たち人間は滅びに向かっている、と聖書は教えています。自分の犯した罪によって滅びに向かっています。その罪とは、自分の命、自分の生活や人生は、自分を造られた神によって成り立っていたということを見捨てていることです。自分で生きようとする、自分を造られた方によってではなく、造った神から離れて生きようとする。その独立が聖書では罪と呼ばれます。

神は初めの人、アダムを造られました。神は人を初めに造られた時に、ご自分のかたちに似せて造られました。それは、神と共にいて、神に頼って、神と語りあって、それで神が世界を支配しておられるように、地上にあるものを管理していくためでした。それで、人はとても想像力のある働きができます。けれども神は、園の真ん中にある善悪の知識の木から取って食べてはならない、食べると死ぬと言われていました。善悪は神の定めている領域です。ちょうど、暖かい火によって恩恵を受けていても、その火そのものに触れたら火傷をするのと似ています。神が善悪を知っておられるので、そのことは神にゆだねて、任せていくことを人は命じられました。けれども、とって食べました。神ではなく自分で判断していくのだ。自分のことは自分で、決めていくのだ。自分の知恵と力で生きていくのだ、としてしまったのです。これが、罪の始まりです。

そしてその性質を遺伝子のようにして受け継いでしまっているのが、人間です。それで人は、自分で生きようとし、罪を犯さざるを得ないようになってしまいました。子供の時に、親は嘘をつきな

いと教えなくても、嘘をつきます。その時から、自分で自分のことをしていくのだ、生きていくのだという罪があるからです。その自分を生かそうとして生きていく中で、自分を正しいとしていくので、この世に調和がなくなり、争いが起こり、あらゆる悲しみが生じています。そして、罪によって私たちは死にます。そして、死後に神の裁きを受けます。この地上では裁判所に一度も足を運んだことがなくても、死んだ後にはこの地上で行なったあらゆること、行動だけでなく、語ったこと、思ったことも全て含めて、申し開きをします。それにしたがって、報いを受けます。それで、地獄に行かなければいけないというのが聖書に書かれています。神は正しい方です。ですから、このことを行なわないといけません。

しかし、そのことを最も望んでおられないのは、神ご自身です。先ほど読みましたように、神は、私たちが一人として滅びることを望まれていません。それで、私たちが滅びないために、ご自分の独り子を死に渡されました。だれが自分の愛する独り子を死に渡せますか？けれども、神はその張り裂けんばかりの苦しみを経たのは、私たちを愛するゆえに行ってくださいましたのです。これがクリスマスです。神が、一人一人を愛しておられます。赤ん坊として生まれたイエス様を見る時、私たちに永遠の命を与える神からの贈り物だということを知ってください。